# 近世京都における形容詞アクセントの周辺

上野和昭

キーワード　アクセント史　形容詞アクセント体系　複合形容詞　接尾辞　形容詞語幹

## 一

中世後期以降の京都における形容詞アクセントの体系は、形容詞それぞれが拍数の違いを越えて一定の類型に収束する方向に変化したが、いわゆる複合形容詞とされるものの中には、体系的強制に抵抗して独自の語構成に寄りかかるものがあって、一律な説明を許さないことが多い。また助動詞ベシは、その口語性を失う過程で形容詞的接尾辞としての性格から脱して独立的傾向を示し、同時にその補助活用形も動詞相当の動きを見せるようになる。さらに、形容詞語幹に接尾辞の付いたものも、それぞれの意味や機能によってアクセントの型を選択していて、必ずしももとの形容詞のアクセント型を引きずりはしない。

このように、形容詞の周辺には体系的な規則では律しきれないアクセントが現れる。それらにはそれぞれに、そのアクセント型を選ぶ理由があり、それに従って、形容詞一般のアクセント体系とはまた別のアクセント類型を構築しているように思われる。小論は、主に平曲譜本から用例をとり、右の三点に注目して考察を加えようとするものである。

平曲譜本は『平家正節』を用いる。それも、とくに断らないかぎり引用は東京大学文学部国語研究室蔵の青洲文庫本に拠るが、必要に応じて尾崎本・京大本・芸大本・早大本などを参照する。[1] ただし対象は「口説」と「白(素)声」の曲節で、一部「指声」からも補うところがある。また引用本文の（　）内は振り仮名、本文の下の〈　〉内は譜記、〈×〉は無譜をあらわす。「コ上」は〈コ〉とした。～は譜記を省略した部分である。その他の資料からの引用はその都度断るが、声点は〈　〉に括る。なお、アクセントの高拍を●で、低拍・下降拍をそれぞれ○・◐で表示する。

平曲譜本はふつう、中世後期から近世中期頃までのアクセント資料として活用されてきた。[2] その中で『平家正節』のできた江戸中期ころのアクセントが現れる「白声」は音楽性が全くない曲節であって、旋律的な影響を考慮しないで済む。また「白声」より

はやや古いアクセントを反映するかとされる「口説」も音楽性が乏しく、一部に語頭低下の譜記を警戒すればよいほどのものである。もちろん語り物の譜本であるから、アクセントの記載を直接の目的としたものでないことに注意が要ることは言うまでもない。

## 二

まず、いわゆる複合形容詞のアクセントについて検討してみたい。複合形容詞にもいろいろな種類があるが、ここで取り上げるのは「名詞＋形容詞」の場合に限ることとする。これらが、中世前期以前から一語としてまとまり、全体としてアクセント史にいわゆる「体系変化」を経て近世に至っているのならば、平曲の譜記には古いアクセントと規則的に対応するアクセントが現れるはずである。ところが実際には、期待される型とは幾分違った譜記も施されている。もちろん近世期の形容詞アクセントは多拍になればなるほど類や型の混乱が進んでいて、一語化した形容詞でも、必ず一定の体系的アクセントで現れるというわけではない。さらに、近世においては一般的な形容詞終止形は二拍ク活用以外ほとんど低起式ではないのに、ただ複合形容詞のみ、前部要素によっては低起式をとることがある。その場合は典型的な形容詞アクセントとの比較はできないから、一語化しているかどうかの判断は容易でない。

たとえば、次の例にある「是非無く」や「大人げなし」という語形のアクセントは、複合形容詞のそれと見なしてよいであろうか。

是非なく御坪の内へ破り入り〈××コ×〜〉　読上文勧5—4口説

おとなげなし〈中上上上中中〉　六下実盛18—1指声

前者の場合は、「是非」は当時○●であるから、[3]それが「無く」●○と接合して、「是非無く」○●●○となり、さらに○○●○となったものと解せられる。それでは終止形「是非無し」あるいは連体形「是非無き」はどのようなアクセント型を考えればよいか。これは用例がなくて推定するばかりであるが、おそらくは現代京都同様○●○○であろう。[4]後部要素「無し・無き」○●によって全体のアクセントが左右されることに注意したい。このような接合的段階のものは、体言と形容詞とに分離して解釈することもまた可能である。後者についても同様で、一語化した形容詞と考えるかどうかには問題が残る。なぜならば、「是非無し」と同様に「無し」のアクセントが色濃く残っていて、単なる二語の接合にすぎないという見方もできるからである。

以上は一語化した形容詞の体系が分からない場合であるが、それが明確な高起式の場合でも、これと同様なことは言える。たとえば「甲斐無し」は古く、次のように声点がある。

かひなく《上上上平》（「峡無く」と「甲斐なく」の懸詞）　古今1057高貞・毘[5]

懸詞であることなど問題も多いが、これを「甲斐無し」と解釈して終止形●●●○と認定する立場も当然あろう。[6]一方、まだこれは接合段階であって、終止形は●●○○ではないかと疑うことも可能である。次の平曲の譜記はその考えを支持する。

甲斐なき命を〈上上××〜〉　十三下瀬尾6—4口説

こうしてみると、いわゆる複合形容詞とされるものの中には、完全に一語化した形容詞かどうか疑わしいものが混入しているように思える。

## 三

そこで次に［「心」＋形容詞］の例を検討してみよう。平曲譜本に現れる、この類の例を抜き出すならば、次のような語が得られる。

心憂し、心苦し、心狭し、心猛し、心強し、心無し、心憎し、心深し、心細し、心安し、心良し、心弱し、心幼し

このうち、「心憂し、心無し、心良し」は同じ二拍第二類ク活用形容詞が後部要素となったものである。もしこれらが平安・鎌倉の昔から複合していたならば、第二類形容詞は古く終止形・連体形○○○○◓、連用形○○○●○、已然形○○○○●○であったから、中世後期以降は、左に示すような体系をなしたものと考えられる。

**終止形五拍のク活用形容詞のアクセント体系**

| | 終止形 | 連体形 | 連用形 | 已然形 | カリ活用形 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第一類 | ●●●●○ | ●●●●○ | ●●●●○ | ●●●●●○ | ●●●●●○○ |
| 第二類 | ●●●○○ | ●●●○○ | ●●○○○ | ●●●○○○ | ●●○○○○ |

「心無し」は終止形と連体形に譜記があって次のごとくであるが、この例は、少なくとも施譜された江戸中期に完全に一語化した形容詞としては認められていなかったことを示していよう。「心」は三拍名詞第五類に属し○○●∨●○○と変化した語であるから、「心無し」に施された譜記は、変化後の「心」●○○が、「無し」○●を従属的に従えただけの、いわば接合アクセントを反映する。もし古く複合していれば、終止形は○○○○◓∨●●●○○となろうが、連用形が○○○●○∨●●○○○とならなければ確証はもてない。

心なしとて〈コ××××××〉　三上少還25—1口説

心ロなき奴(ヤツコ)までも〈コ××××〜〉　二下青山2—3口説

「心良(快)し」は古くから一語化していたらしい。古く○○○○◓を反映する声点や節博士がある。[7] 平曲には補助活用形が現れ、規則的変化型である●●○○○○が期待されるところであるが、そうはならず、左のような譜記が施されている。筆者はこの譜記を、「心良し」という語がさらに「心良かる」という動詞相当のものになった状態のアクセントを反映している、と理解したい。

心よからざりけるが〈上上上上上上××××〉　十四上六度18—5素声

「心憂し」はさらに難しい。左の譜記から推定されるアクセントは、終止形・連体形●●●○○、連用形●●●○○、已然形●●●●○となる。終止形・連体形の譜記は、それぞれ古く複合していたとも言えるものではある。しかし、連用形のそれは期待されるものとは異なる。そして已然形たるや第一類形容詞のアクセントに同じだ。

心うしとて〈上上コ××××〉　十一上妓王47—5口説

心うき境なれば〈上上コ×××〜〉　三下先帝16―3口説
心憂(ウ)フこそ〈上上コ×××〉　十上北方6―3口説
心憂(ウ)ければ〈上上上上上×〉　五句高野5―1素声

次いで三拍ク活用形容詞の例について検討すると、後接する形容詞は「狭し・猛し・強し・憎し・深し・細し・安し・弱し」の八語で、いずれも第二類に属する。これらは古く一語化していれば、終止形・連体形は○○○○○◓▽●●●●○○という変化を遂げたはずで、連用形ならば○○○○●○▽●●●○○○の変化を、まずは想定してよかろう。もちろん型の統合もあったが、ここに連体形と連用形のアクセントを期待通りに反映した譜記がある。

心強きも〈上上上上中中〉　十四下小宰51―1指声
心強ふ宜へ共〈上上コ×××〜〉　三下平流16―1口説

三拍シク活用形容詞が後接した唯一の例である「心苦し」も次のようにあって、この限りでは伝統的なアクセントを受け継いだもののように見える。

心苦しき折節なり〈上上上上上×〜〉　読下伊豆15―5口説
心苦しうおもひ給ひて〈上上上コ×××〜〉　十五上頚渡21―1口説

しかしまた、その一方で左のような接合形も、もちろん現れる。

こゝろたけき大将軍なれども〈上×××××〜〉　十五下臣誅8―2口説
心弱ゥ思召べからず〈コ×××××〜〉　七下惟水16―2口説

ところが「心弱し」には、さらに次のような譜記もある。

心弱ふては〈上×××コ×××〉　七下惟水10―1口説
こゝろ弱ゥふや〈上上上×上×〉　二下横笛15―1口説

右の第一例は、二つの語それぞれのアクセントが譜記に反映したものであるが、第二例は、曲節が「口説」であることから、南北朝期にあったとされる「体系変化」の過程（○○○○●○▽●●●○●○▽●●●○○○）を反映しているとは言えそうもない。[2] 江戸期において結合の途中に現れたアクセントの反映とみるのが妥当であろう。「心」は近世●○○であること動かないし、「弱く」のウ音便形も○●○である。それらが接合すれば、前部要素のアクセントが生かされるのは、すでに見たとおり。しかし、「弱し」に連接する場合に、「心」が連結（sandhi）型[8]●●●を採用したものとすれば、このような途中段階●●●○●○を経るはずであろう。その結果、当時一般の六拍形容詞連用形アクセント●●●○○○型と同じ型をとったのである。そうなると同様な後部三拍の複合形容詞の場合も、一見「体系変化」後の規則的な変化型をとっているようではあっても、その複合の古さをアクセント型は保証していない、ということになろう。連結型ということは、近世のアクセントについて言われることはあまりないが、助詞ノの接続形について「後続語との複合による平板化現象」（奥村三雄一九八一：四四〇頁）などと言われるものがその一つである。[9]

平曲譜本は江戸中期に校訂されたもので、「口説」や「白声」には、主としてその頃ないしそれよりも少し前のアクセントを反映する譜が付けられてはいる。しかし詞章は古くからのものであるから、自然な口語そのものが反映したとばかりは言い難い。

「心弱し」に三つの段階のアクセントが現れるのも、そのような背景によるものであろう。もっとも平曲譜本の無譜は、「引き句」の場合には旋律の一部を担うものであって、決して自由な語りを許すわけではない。したがって「引き句」に属する「口説」の曲節で、譜のある部分がアクセントを反映するとすれば、無譜の部分にもそれが反映していると、まずは考えてみなければなるまい。だからここに接合と解釈したものも、後部要素に譜が省略されているなどとは言えない。唯一の「語り句」である「白声」も、そこに譜が施された事情を思えば、京都アクセントに馴染まない者もこれを語ったのであるから、みだりに譜を省略するわけにはいかなかったはずだ。ある部分を強調する関係で、ほかの部分が低平化することは平曲にもままある。しかし、それは省略ではない。また、二語のアクセントが反映した譜記について、聞く者の理解を助けるために前後それぞれの要素のアクセントを反映する譜を施したという解釈もできようが、これも積極的にそうだと主張することはできない。「心弱し」の譜記に窺われる三様のアクセントは、そのままに当時のものだとは言えないかもしれないが、当時の複合形容詞のアクセントの成立を知る上には有効なものであると考える。

「心細し」は連濁の具合からしても一語化が完了していたものと考えられるが、平曲には次のようにあるばかりで、前部連結型の結合アクセントとも、古くから癒合していた複合アクセントとも解釈できる。

心細ふこそ〈上上コ××××〉　七上烽火9―5口説

しかしまた、京都大学附属図書館中院文庫にある『古今和歌集聞書』の声点や、同じく『古今聞書』の胡麻章には、「心細く」に●●●●○○の窺われるものがある。[10] これは近世初期の京都アクセントを知る手懸りになるものだが、単なる結合アクセントとも言えないし、もちろん接合アクセントでもない。古く複合して前後部癒着していれば（○○○○●○〉●●●○○○であってよさそうなものだが、それとも異なり、終止形・連体形の●●●○○に倣った姿である。「細く」という後部要素のアクセント型を捨ててしまっていることに注目される。その点、先に引いた「心憂う」と同様、複合の進行を示唆しているように思われる。[「心」＋形容詞] ではないが、次の「物憂し」の例も参考になる。

もの憂かる（ねに）《平平上平上》　古今15　家・訓
《平平上平平》　古今15　寂
《○○上平平》　古今15　毘[5]
《上上平平平》　古今15　古今和歌集聞書[10]

懶（モノウ）く思召て〈上コ××〜〉　十二上許文2―4口説

「物憂し」は古今集の声点から推定して、古く終止形・連体形○○○◐、連用形○○●○と解せられている（秋永一九九一）。しかし、この連用形アクセントの後世の変化型は●○○○になるはずだが、そうはならずに●●○○で現れる。これも単に終止形・連体形に倣ったとみるか、それとも後世「もの」の連結型が現れたとみるか難しいところである。

## 四

いわゆる形容詞型活用の助動詞ベシが動詞の終止形（ラ変は連体形）に続く場合にも、そのアクセントにはいくつかの問題がある。これについては、はやく金田一春彦（一九六四：四八〇頁）が、ベシは「一つの付属形式」にすぎず、「それが付いた全体が形容詞のようなアクセントをもつ」ものだと述べられた。「一つの付属形式にすぎない」というところには、その独立性を指摘する奥村（一九八一：四八八～九頁）の見解もある。とくに中世後期以降、ベシが文語的性格を帯びてくると、そのアクセントは伝統性を失い、独立的性格を増してきたのではないかと考えられる。

近世、平曲譜本の譜記から知られる、助動詞ベシのアクセントに関わる「謎」については、すでに奥村が要領よくまとめている。すなわち、形容詞的接尾辞であるはずのベシが、「上接動詞の如何をとわず、終止・連体・連用の諸形は常に○○型をとり、補助形はすべて●○○型をとる」というのである（同三六五頁にも言及あり。奥村和子一九九六も参照）。これはどういうことかというと、まず第一類動詞たとえば「寄る」にベシが付いても、第二類動詞たとえば「有り」にベシが付いても、いずれも同じように前接した動詞部分は高平で、それにベシが低く接続し（以下第三類動詞については説明を省略）、動詞の類別による差が現れない、ということなのである。二拍第一類動詞である「寄る」にベシが付けば、全体で第一類形容詞相当になるから、アクセントは近世●●●○となるはずである。それにも関わらず、ここには●●○○として現れる。そして、この現われ方は規則的ですらある。また第二類形容詞相当の「有るべし」は、終止形ならば問題なく●●○○で現れるが、「有るべく」となると（期待されるアクセントは○○●○∨●○○○であるのに）これもまた終止形と同様に●●○○となる、という極めて不思議なことが起こっていた。

寄べしと〈上コ××〉　十二上頼豪3―1口説
あるべし〈上コ××〉　炎上清水12―2口説

問題はこれに止まらない。ベシの連用形ベクに動詞のアリが接続して成立した補助活用形についても、ベクが常に○○であるのに対して、こちらは常に●○○型をとっているのである。それもベカラ・ベカリ・ベカルと形が変わっても同様で、前接動詞が第一類であろうと第二類であろうと、なんら関わりなく実現する。そして、動詞部分はといえば、それも高平になっていて例外は少ない。たとえば、第一類の「知る」に付いて「知るべからず」となった場合には●●●○○○、第二類の「逢ふ」に付いて「逢ふべかりしを」となった場合には●●●○○○○と解釈できる譜記が見られる。この場合、前者には問題がないが、後者は○○●○○○○∨●○○○○○○が期待されるところである（奥村 同：三六五頁）。そして、このような時に、なぜ第二類動詞までが高平になるのか。そのことが、これまで十分には説明されてこなかった。

知るべからず〈上上コ×××〉　揃物大衆10―5口説
逢べかりしを〈上上コ××××〉　七上法還6―4口説

| 上接動詞 | ～ベシ・ベキ | ～ベク | ～ベケレ | ～ベカラ・ベカリ・ベカル |
|---|---|---|---|---|
| 第一類 | ●…●○○ | ●…●○○ | ●…●○○○ | ●…●●○○ |
| | | ●…●●○ | ●…●●○○ | |
| 第二類 | ●…●○○ | ●…●○○ | ●…●○○○ | ●…●●○○ |
| | | ●…●●○ (●…●●○○) | | |

これについて、奥村はベシの「文語的性格」や「一語的独立性」を指摘するが、ここではその考えをさらに進めて、ベシの文語性がどのようにその独立的傾向を促したかについて、多少の考察を付け加えたい。

中世前期以前、形容詞語尾として機能していたベシが、中世後期以降徐々に文語的性格を強め、『平家物語』の詞章にはあっても、現実に音声言語として接することが稀になってくると、ベシの部分が特別に扱われて、伝統的語り方から遊離し、独立性を帯びるということは容易に理解されよう。それがベシのアクセントの変容に決定的に働いたと考える。ベシは、語源的には●●（秋永一九九一：二二五頁）であったが、中世後期以降、二拍の形容詞は多く○●であったので、それに類推した。すでに前節で、複合形容詞について述べたように、前に接する動詞終止形部分の伝統的アクセント（高平）を保存しながら、またこれをそのまま連結型相当のものに転換しながら、自らはベク●○が～ベシ・ベキ（～○○）に類推して変化したのであろう。～ベクの場合に、まだ～○○に成りきらず●○と推定できる譜記がある（左例）のも、その移行が途中の段階だったからである。

たまるべうも〈上上上コ××〉　（溜）十二上僧死3―1口説

ベシは古く前接の動詞と癒合して形容詞の一部となっていたが、それが独立的傾向をもち、全体の形容詞としては（複合形容詞の問題に喩えるならば）結合段階にまで複合の度合いを緩めたものと理解される。

続く問題は、ベカリなどの補助活用形が常に●○○で現れるのはなぜか。また、その際に前接動詞部分が高平になるのはなぜか、ということである。これも、やはりベシの独立的傾向に連鎖した現象であると推定する。ベシが独立的傾向をもてば、当然ベカリも一語の動詞相当のものに変質するであろう。［第二類動詞終止形＋ベカリ］の前部要素が、～ベクの形としては伝統的な［……●○＋ベク］から、連結型の……●●に移行することは、すでに述べたところである。ベクの独立的傾向は、また同時に補助活用として以下に続く動詞アリとの結びつきを深くした。その結果～ベカラ・ベカリ・ベカルという活用形をもつ動詞相当のものができたのである。已然形ベケレが、次の例のように●○○と○○○両方になっているのは、拍数の点からも共通性の大きいベカリ・ベカルなどと、伝統的な所属系列である本活用との間で、類推の力が交差したためであろう。

候ふべけれども〈上上上上上××××〉十五上三日26―4白声
給ふべけれと〈上上コ××××〉　七下猫間16―1口説

## 五

近世における、いわゆる「形容詞語幹形」のアクセントについ

ては、やはり奥村（一九八一：四一九～四二七頁）に詳しく述べられている。それによると、第一類形容詞の語幹形は●●、●●●などの型、第二類形容詞は○●、（○○●∨）●○○であったと推定される。そして、接尾辞サの続く場合も、語幹部分はこの姿で現れるという。たしかに「悲しさ」などの第一類形容詞に接尾辞サが接続した形は、●●●○あるいは●●●●などと、語幹部分は●●●型になり、「恋しさ」などの第二類形容詞の場合は、●○○○などと語幹部分が●○○になる。これは、多少の例外はあるとはいえ、古く高起式か低起式かという類別によって、［形容詞語幹＋サ］のアクセントが定まるという規則性を指摘していて興味深い。しかし、同じ接尾辞接続形でも［形容詞語幹＋ゲ］の場合には、これをそのまま適用することはできないようだ。たとえば「うらめし」の語幹形にそれぞれゲ・サの付いた左の例を比較すれば一目瞭然である。

うらめし気(ゲ)にて〈上上上コ×××〉　十下六乞28―2口説

恨めしさよ〈上コ×××〉　十一上妓王59―5口説

**［形容詞語幹＋サ］に付けられた譜記から推定されたアクセントと語例一覧**

（平曲譜本には「～しさ」の部分は～ッサと発音するよう注記がある）

四拍　●●●●（うたてさ）●●●○（かなしさ）／●○○○（いぶせさ　うれしさ　くるしさ　こひしさ　はかなさ　めでたさ）／●●○○（ものうさ）

五拍　●●○○○（あさましさ　いたはしさ　いとほしさ　うらめしさ　おそろしさ　なつかしさ）／●●●○○（あぢきなさ）○●○○○（たよりなさ）

六拍　●●●●●●（かたじけなさ）／●●●○○○（こころにくさ）／●●●●○○（おほつかなさ）

七拍　●●●●○○○（ものさはがしさ）

九拍　○○●●●○○○（おんこころぐるしさ）

「うたてさ・かなしさ・かたじけなさ」は第一類形容詞に基づくもので、「悲しさ」は次のように●●●○があるが、第二例には諸本に異同があり、●●●●もあったらしい。

悲しッメさにも〈上上コ×××〉　十四下小宰25―4口説

悲しさよとて　〈上上コア×××〉　七下重斬16―3半下

（早大本は同譜。尾崎本・京大本は「悲しさ」の部分に〈上上上コ〉）

また、例外型で現れる「ものうさ・あぢきなさ・たよりなさ」などは複合形容詞からの例。ほかはみな第二類形容詞に付いたものということになる。「こころにくさ・おんこころぐるしさ」は同じく複合形容詞に基づくが、一応規則通り。接頭辞「おん」は独立性が強いので、これを除いた部分で考える。「浅ましさ」は語源的にはともかく、平曲では「浅まし」はむしろ第二類形容詞のような現れ方をする。

**［形容詞語幹＋ゲ］に付けられた譜記から推定されたアクセントと語例一覧**

三拍　●●○（きよげ　をしげ）

四拍　●●●○（あやしげ　うれしげ　きょう(興)なげ　くるしげ　ゆしげ）／●○○○（すげなげ）

五拍　●●●●○（いまはしげ　うらめしげ　おそろしげ　おもしろげ

しどけなげ　たのもしげ）

六拍　●●●●●●○（いそがはしげ　こころはそげ　なごりをしげ）

／○○●●●●○（おんけだかげ）

七拍　○○●●●●●○（おんなつかしげ）／●●●●●○○○（こころぐるしげ）

ほとんどが後ろから二拍めに核のあるH(-2)型である。中には複合形容詞も含まれるが例外は少ない。ただし「すげなげ」（十四上一魁18―3口説）は正節系諸本みな同譜で不審。また「しどけなげ・いそがはしげ」は語頭低下した譜記をこのように解釈した。「こころぐるしげ」（三上少還33―1素声）は、東大本・芸大本は〈上上上上××××〉、尾崎本・早大本は〈上上上上上上上〉、京大本もこれと同様に施譜されるが、下二譜を朱で囲み諸本の異同を注記する。いずれを採っても規則どおりにはならない。ほかに「こともなげ」がある。「事も」の連結型は著しい。

事もなげにぞ〈上上上上××××〉　十一下西光13―4素声

全体としてみれば、［形容詞語幹＋ゲ］にはH(-2)型が規則的に現れる。形容詞の類別のいかんに関わらず、と言いたいところだが、第一類形容詞の確かな例がない。おそらく第一類からのものは、H(-2)型かH0型に落ち着いていたのであろう。

しかし、形容詞語幹形のアクセントを問題にするかぎりは、それに接尾辞サの接続した形とゲの接続した形とで、語幹部分のアクセントが異なるというのは、どこか割り切れない。奥村（一九八一：四二五頁）は、この点について以下のように説明する。すなわち、かつて［形容詞語幹形＋ゲ］の場合も［～＋サ］と同様に、語幹形●●●、●●●や○●、○○●などに接続していた。それが、～サよりも～ゲの方が複合が強かったために、～ゲの語幹部分に○●→○○、○○●→○○○のような「複合変化」が起きた。「その複合語的アクセントから規則的に変化したもの」が平曲資料の姿だ、というのである。

これを、三拍・四拍を例として図示すれば以下のようになろう。

第一類　●●●　●●●●

第二類　○●●　○○●●∨●○○○

～サ（サは高接したものとして推定）

～ゲ（ゲは低接したものとして推定）

第一類　●●○　●●●○

第二類　○●○∨○○○∨●●○　○○●○∨○○○○∨●●●○

奥村の言う「複合変化」とはどういうものであろうか。語幹部分と接尾辞とが複合して、一語になることによって引き起こされる変化ということであろう。そのような場合にかぎって、たとえば○●○∨（○○●∨）○○○といった変化が起こるものであろうか。音韻変化はそれぞれの語性を越えて一律に起こることを原則とする。

それよりも、第二類形容詞語幹部分に接尾辞サが接続した形は、古く○●●、○○●●などの型をとり、同じく接尾辞ゲの接続した形は○○○、○○○○などの型をとったと考えてよいのではないか。接尾辞と合して一語として機能しているものから語幹形を抽出し、そのアクセント型が別の複合形のそれに合致しないからというので「複合変化」を想定するのも場合による。また～ゲ

がなぜ低平型をとったかについては、遡及的説明にさしたる意味はないものと考える。仮に語幹部分だけを取り出すならば、その○○・○○○型は○●・○○●型から変化したものではなく、～ゲの語形そのもののアクセント型○○○・○○○○として与えられたものの一部であるのだから。

ところで～サのアクセント型の変化については、秋永（一九八○：四四九～四五二頁）に詳しい。すでに見たように、奥村の言う第二類形容詞語幹形アクセントが、この場合には～サの中に保存されている。たしかにそれは複合の程度と関係するものであろう。なぜならば古く「高さ・広さ」などの○●●と「すべなさ」などの○○●●[11]とは後ろの二拍だけが高いという、もとの形容詞（連用形）語幹部分のアクセントが明らかな型であるからである。その点では、～ゲの場合よりも複合は緩いと言えよう。

さて、もう一つの接尾辞ミが付いたものは、平曲にその例が少ない。奥村（一九八一：四二〇～四二一頁）に挙げるもののうち「悔しみ」は動詞連用形と考える。また「惜しみ」も動詞からの派生名詞とするならば、「口説」と「白声」の曲節では、ほかには「広み」くらいしか見当らない。「広み」は●●○、もと○○○からの変化形と思しく、～ゲの場合と同様である。

広みに出デて〈上上××〉　八上富士1―5口説

奥村が～ゲと～ミとを一緒に扱い、三拍ならば○●○から○○○へと変化したように考えたのには、～ミが古く両形の間で揺れたと見たからにほかならない。しかし、秋永（一九九一：三〇～三六頁）も言うように、「…を～み」のような、以下に副詞的に続く～ミ形は、三拍形容詞第一類からならば●●○、同じく第二類からならば○●○という型をとった。それは、いわば用言並みの型である。体言としては古く●●●または○○○が普通で（奥村もこれを「名詞的性格が著しい」という）、ここにアクセント上の区別があったとみる考えに従いたい。前者は後に用いられなくなって、体言としてのアクセントが伝わった。したがって、この場合、語幹部分に「○●→○○」などという変化があったように見えたのは、実はアクセント変化として扱うべきではないものである。

注（1）東大本は、原本（13 119B）に拠る。金田一春彦（一九九八）は同じものの影印。尾崎本は大学堂書店刊本（一九七四）に、京大本は臨川書店刊本（一九七二）に、芸大本（東京芸術大学附属図書館蔵『平家正節鈔』W768. 3 H11）と早大本（早稲田大学演劇博物館蔵『平家正節』ト 27 12）は原本に、それぞれ拠る。

（2）金田一春彦（一九五九：一三・一〇頁）、同（一九七四：一八頁）、奥村三雄（一九八一：五二六頁）などを参照。とくに「折声」の譜記が反映するアクセントの評価については、金田一はこれを南北朝期のアクセントの反映したものと主張する。そこには、いわゆる「体系変化」の途中の段階と思しきアクセントが窺われるとされる。

（3）坂本清恵（一九八七）および秋永一枝ほか（一九九七）に拠る。

（4）『日本国語大辞典』（小学館）〈京ア〉の項に拠る。

（5）秋永（一九七二・七四）に拠る。

（6）秋永ほか（一九九七）の認定に拠る。秋永（一九九一：三一三頁）は連語とする。

（7）たとえば「コ、ロヨシ〈平平平平東〉」図書寮本類聚名義抄239－2

（勉誠社刊本に拠る）、「ココロヨキカナ〈十十十十斗十十〉」大慈院本涅槃講式17-9（金田一　一九六四に拠る）など。桜井茂治（一九八四）に『仮名抄』の例として「コ、ロヨシ〈徴徴徴角角〉」「コ、ロヨク〈徴徴角徴角〉」54-4などが挙がっている。古くから一語化していて、「体系変化」によって、そこから規則的に変わったことが看取される。

（8）川上　蓁（一九七七＝一九九五：三五二～四頁）

（9）この連結型は、もちろん高起式にのみあることではないし、助詞接続形ばかりでなく、たとえば同じ「十月」に次のような●●●○と●●●●との違いが出てくるのも、後に続くものの有無によっている。「十月ノムに〈上上コ××〉」（五句元肪7―1口説）「十月ッメ四ッ日の日〈上上上コ××××〉」（二下征夷2―1口説）

（10）坂本清恵（一九九四）に拠る。

（11）「タカサ〈平上上〉」観智院本類聚名義抄　法下23オ2、「ヒロサ〈平上上〉」同　僧中48オ7など（天理善本叢書に拠る）、「すべなさ〈平平上上〉」古今656　高貞・毘（秋永一九七四に拠る）

**【参考文献】**


秋永　一枝（一九七二・七四・八〇・九一）『古今和歌集声点本の研究』資料篇・索引篇・研究篇上・研究篇下　校倉書房

秋永　一枝ほか（一九九七）『日本語アクセント史総合資料　索引篇』東京堂出版

奥村　和子（一九九六）「動詞アクセントに関する一考察―いわゆる特殊形をめぐって―」『女子大文学（大阪女子大学）』47　国文篇

奥村　三雄（一九八一）『平曲譜本の研究』桜楓社

川上　蓁（一九七七）「アクセント単位の大きさ、強さ」『国語学』111『日本語アクセント論集』（一九九五　汲古書院）所収

金田一春彦（一九五九）「平曲の音声（下）」『音声学会会報』101（一九六四）『四座講式の研究』三省堂

（一九七四）『国語アクセント史の研究―原理と方法―』塙書房

（一九九八）『青洲文庫本　平家正節』三省堂

坂本　清恵（一九八七）『近松世話物浄瑠璃　胡麻章付語彙索引　体言篇』アクセント史資料研究会

（一九九四）『近世上方アクセント資料索引』アクセント史資料研究会

桜井　茂治（一九八四）『中世京都アクセントの史的研究』桜楓社



（付記）本稿は、早稲田大学一九九八年度特定課題研究助成費（個人研究）課題番号98A-539による研究の成果である。